

令和元年動物愛護法改正に関して

-次の改正までに考えたいこと-

2019年6月に改正されました動物愛護管理法では、生後56日に満たない犬猫の販売禁止となりましたが、国の天然記念物に指定されている日本犬6種（柴犬、紀州犬、四国犬、北海道犬、甲斐犬、秋田犬）は繁殖家から飼い主に直接販売する場合に限り例外となることが決まりました。

まず、

1. なぜ56日齢（8週齢）まで販売ができなくなったのでしょうか？

ScottとFullerによる犬の発達行動学の研究（1967年出版）から中型犬5犬種において、子犬の発達行動学を調査しましたところ、母犬の離乳はだいたい7週から8週齢の間に行われており（Scott and Fuller, 1967 p121）、母犬たちは7週齢くらいから乳離れの作業を行います。子犬のストレス行動を同時に見ると、子犬を単独で新奇な場所に移すと、6-7週齢の子犬をピークにストレスからかなりなく行動が見られますが、そのあと徐々にその行動が減っていることが報告されています（Scott and Fuller p103）。また、犬には社会化期というものがあり、この社会化期に人とまったく触れることがない環境にいた場合、人のことを怖がるようになってしまいます。とくに母犬、兄弟犬、として人との社会化は、6-8週齢の間が重要なタイミングとなります（Scott and Fuller p 126, p 385）。他に、子犬の離乳（7-10週齢くらい）の始まる7週齢くらいは、色々な発達が劇的に起こる時期です。離乳が終わると母犬との関係も徐々に変わってきます。

母犬からの離乳の時期は脳神経科学的にもいろいろな変化が起きており、社会化という意味でも大きな役割がある時期です。今回の8週齢の規制は、社会化期の大切な時期に、安定した環境を整えられる繁殖家と母犬、兄弟犬の元で、犬として必要なコミュニケーションを学んでもらい、そのあと母犬や兄弟犬から離して販売することが良いのではないかと、という考えからです。アメリカでも特に生後〇日以前に離乳したら厳罰になるというような法律はないかと思いますが、法律に定められていなくても通常、よく勉強されている繁殖家は、安定した子犬を提供するためにも母犬から離して販売するのは、8-10週齢が良いと書かれています（VCA）。また、英国においては8週齢以下で子犬の販売を禁止する法律があるようです。

2. なぜ日本犬は例外になったのでしょうか？

日本犬6種に関しては、2点の論点があり、除外対象になりました。

1) Scott と Fuller の本 (p385) に子犬は人に対して 6-8 週齢で慣れるので、7 週齢でせめて出したほうが飼い主になつく、との意見です。

しかし、この本は 1 冊全部丁寧に読んでいただくと、この実験施設において、6-8 週の時点でハンドラーがハンドリングをした場合と、全くせずにいた場合の犬の将来的な人へのなつき方を比べている結果から、人への社会化は特に 7 週までに行うのが大切、と書いています。今回、論点になっている日本犬は、Scott と Fuller の研究施設にいる犬のような実験動物ではないことを考えると、繁殖家のみなさまは、生まれたときから子犬の世話をし、管理をし、ハンドリングをしているはずなので、7 週齢まで触らずにほっておいているような方のもとにいない限り、8 週齢になるまでハンドラーや母犬、ほかの子犬と一緒にいることは社会化期の子犬にとって一番よいものではないかと思えます。実際に犬を繁殖されている経験豊かな方々は犬種に限らず、8-10 週齢くらいまで母犬と一緒に手元に置いておかれることを望まれていますので、なぜ日本犬が 8 週齢に届かない時点で母犬から離していいことになったのかの根拠の理解が難しいです。

もう 1 つの論点は、

2) 日本犬はオオカミに近い犬種であるから、オオカミの離乳時期は早いから、といった説です。

日本犬はオオカミに近いことは DNA の調査からわかっているようですが、オオカミのように社会化期が早く終わるなどの違いは柴犬には報告されておらず、DNA の配列から、樹形図の上では一番オオカミに近いのであるのであればなおさら精神の安定した犬にするために母犬との離乳期を気を付けてなるべく長い間、人間、母犬、子犬たちの社会化の時間が大切であると考えます。

3. 子犬が 8 週齢までいると母犬を痛めてしまう？

離乳の時期の子犬はやんちゃ盛りで、歯も生えていますので、母犬のおっぱいに激しくかみつきながらお乳を吸おうとすることもあります。また、6-8 週齢くらいになると、子犬同士でも特定の子犬をいじめるような行動があったり、子犬同士で徒党を組んで母犬に攻撃的になる（遊び行動として）ことがあります。狭い面積しかない場所で子犬と一緒に母犬が過ごしていると、子犬たちがいたずらのつもりで徒党を組んでお母さん犬を襲ってきた場合に母犬は逃げる場所もなく、子犬たちにかまれてしまいます。

Scott と Fuller の研究でも十分な広さの面積があってこそ母犬はゆっくり子犬に向き合い離乳をさせることができます。8 週齢まで子犬を母犬と一緒に健やかにいさせるには、犬の親子のいる環境と面積も十分あることが大前提になります。十分な広さのある場所であれば、母犬が子犬から傷つけられることはないと考えます。